38

古代日本に於ける呪術医療への考察

稲垣　直

日本の体系的呪術医療が飛鳥時代以降渡来した帰化人によってもたらされたものである事はいうまでもない。ただこれには、仏教に基礎を置く呪術即ち仏呪と、道教に由来する道呪とがあり、具体的には『日本書紀』敏達天皇六年条の呪禁師の来朝が呪術関係者の最初の渡来として注目されるが、前後の文脈からしてこれは仏呪と考えられ、一方、持統天皇五年条に見られる呪禁師はすでに道呪の渡来して居る事を暗示するものと見て宜かろう。

そして飛鳥・奈良時代には、仏呪・道呪が平行して行われて居た事は大宝および養老律令その他の文献からうかがわれるし、律令制下にあっては道呪に基づく呪禁師の設置も見るに至った。ただ、この呪禁師は平安時代以後、公的機関としては消滅する。その原因に就いては前回に考察したが、新村拓博士は消滅させられた後の呪禁師の伝統が㈠密教、㈡陰陽道につながって行く可能性を示唆された。

事実、平安時代初頭に空海がシナ本土から真言宗を導入して以来、それまでの雑部密教（雑密）は『大毘盧舎那成仏神変加持経（大日経）』および『金剛頂経』を所依の経典の中軸とする純正密教（純密）へと発展し、従って呪術医療も密教教理を背景とする加持祈禱が主として行われるようになった。

その具体的内容即ち使用された経典、種々の曼荼羅、修法の順序などに関しては古文献にもそれが明らかにされて居る。

その中にあって、病気の原因として悪霊その他の精神的所産の憑依を考慮し、それからの解放が治療手段として重視された事は注目さるべきである。もとより憑依妄想は人類社会に共通する現象であるが、日本では生霊・死霊・物怪といった神秘的観念の存在が汎く認められ、その憑依を蒙った人物―よりまし―に祈禱を行う事によ

って治療効果を期待するという手法が旺に実施された。

（この憑依および憑依からの解脱という思考形式が日本の国民性に密着したものである事は、それが王朝文学に散見し、さらに現代に於いてさえ一部に民間療法として残存する事実を見ても了解される。）

これと関連して挙げられる可きは修験道の成立およびその発達であろう。上述の憑依蟬脱に際しての修験者の活動は呪術医療史上無視出来ない。一体、山林抖擻（とうそう）の練行によって特別の霊力を獲得するという事はすでに奈良時代の行基、良弁などに見られる処であり、その後、空海、円珍らもその方面の行迹を以て聞えた。人口に膾炙する『志貴山縁起絵巻』に見る命蓮の物語もそうした山間修行者に特別の験力を期待する思想傾向の一つの現われといってよいであろう。

このように山岳修行の重要性が強調された結果、それを組織化し宗教行事の主体とする修験道が生れて来る。それは形式上、密教に属するが（現在では、醍醐寺を本拠とする当山派、聖護院を中心とする本山派に分属する）、その信仰内容は神仏習合を基盤とし、道教的要素をも包摂したものであり、それらを捨象する事によって成立した宗教という事が出来る。

その教徒が山伏（山臥）という形で日本全国を遊行して歩いた事が民間医療に果した役割は大きい。

次に陰陽思想自体は、直接、医療との関係はないが、呪術医療者の思考方式と行動原理におよぼした影響は無視出来ない。

古代日本に於ける呪術医療の思想的背景が、シナ本土固有の自然観と西方に由来する密教とを輸入し、日本の精神的風土の中で渾然一体化する事によって形成されたものである事実を再確認し、特に憑依からの解放と修験道のそれへの参加とに焦点を当てて考察したい。

（東京大学医学部第三内科）